一宮西高新聞

発行所
愛知県立一宮西高新聞部
一宮市萩原町串作河田1
電話一宮（68）1191
株式会社 大東社
電話一宮（62）1168

おかげさまで
創業130周年
教科書・参考書はじめ書籍・雑誌
事務用品のことなら
松清本店
稲沢市高御堂1-2-1
電話 0587-32-0048

成人年齢が引き下げられるかも

18歳って成人?!

成人年齢を20歳から18歳に引き下げようという動きがある。賛否両論いろいろある中で、本校の生徒たちはどのように考えているのだろうか。各学年2クラスずつにお願いしたアンケートを手がかりに考えた。

なぜ今、成人年齢引き下げなのか？

今、日本では成人年齢を18歳に引き下げようという動きがあるが、その発端は何だったのだろう。

表を見て分かるように、日本の成人年齢はこの100年、20歳から変わっていない。しかし、他の先進国は1960年代頃に成人年齢を18歳へと一斉に変えていき、現在では欧米諸国の80％以上の国が18歳成人となり、現状ではサミットに参加する国で成人年齢が18歳でないのは日本だけとなってしまった。

2007年に憲法改正に関する国民投票法において、その選挙権が18歳と定められ、民法を始めとする他の法律の整合性を図る必要も出てきて、法制審議会で審議が進められているのだ。

成人年齢の引き下げには、若年層に政治参加意識をもたせ、少年法の改正に連動させて犯罪の低年齢化や悪質さ解消を図るねらいがあるとされている。果たしてねらい通りに行くかどうか、注目だ。

大人であるために必要なことは？

アンケートでは、まず「大人である条件」を3つまで選んでもらった。

その結果、「精神的な自立ができているかどうか」「社会常識があるかどうか」「責任能力が備わっているかどうか」の3つを選んだ者が、男女差も学年差も関係なくダントツに多かった。

次いで、「親から自立できているかどうか」が選ばれたが、女子が男子よりも多い結果となった。

実はこの大人であるかどうかの判断基準は、朝日新聞の大人対象アンケート（右下注参照）を参考に製作したものである。その結果では、西高生と傾向はほぼ同じで、先の3つの判断基準と並んで「親から自立できているかどうか」が多く選ばれていた。

やはり子どもを見る大人としては、「自分達から自立できてこその大人だ」と考えているようだ。

本校では「身体的に成熟しているかどうか」の項目を選んだ生徒は多くない。しかし、大人ではこれを選んだ者が多くいた。18歳ともなれば十分に働ける身体を持っているので成人で良いと考えるためだろう。

「親から自立していない」女子が大多数

こういった大人であるかどうかの基準に照らして、現在の自分はその大人基準に合致しているかどうかを尋ねた。

その結果はグラフの通りだが、「お金の重要性」についての理解はできている者が男女とも多い。

しかし、注目すべきは「精神的自立ができている」「社会常識がある」「親から自立できている」の項目で、女子に「できていない」生徒が、男子と比べて多いことである。

とりわけ「親からの自立」ではその傾向が顕著で、ずっと親がかりでいる（いたい？）女子の親依存傾向が浮かび上がってくる。

成人年齢引き下げに賛成15％、反対40％

さて、成人年齢を18歳に引き下げることについての賛否はグラフの通りである。「どちらとも言えない」と答えた女子がやや多いものの、男女ほぼ同じ傾向となった。

賛成が15％、反対が40％という結果は、朝日新聞の賛成40％、反対60％と比べると、当事者である若者の消極性が気になる。

賛成理由としては、「選挙権行使」「犯罪防止」「1人で契約可能」などがあがった。

一方の反対理由としては、「飲酒・喫煙が早まる」「成人式と受験が前後する」「1人で契約可能」などがあがった。女子に「早く大人扱いされる」（のが嫌）を選んだ者が一定数いるのが、先の依存傾向と関連している。

世論は賛否拮抗

世論としては、賛成意見と反対意見は拮抗している。

賛成として多いのは、引き下げによって若者に自立心を植え付けたい、という理由だ。自分が成人だという自覚や、政治参加への意欲を高めさせようというのだ。多くの大人が政治に無関心な今、低い投票率を上げるために、成人年齢を引き下げるべきだという意見もある。

反対意見では、親の承諾なしで様々な契約ができてしまうことに、心配の声が上がっている。例えば悪徳商法にはまったとき、成人でなければ可能である契約取り消しが、成人だとできなくなる。18歳では社会不慣れなため、このようなトラブルに巻き込まれる事は大いに考えられる。

メリット・デメリットの双方があるからこその議論だろうが、どちらも的を射ているからこそ、余計に難しい。

本校の公民科の先生の意見も聞いてみた。

まず林英之先生。「高校生というのは日本ではある種、社会から隔離された存在である。社会の仕組みもきちんとわかっていないのに18歳で成人というのには賛成し兼ねる。例えば、成人すれば色々な契約等を親の同意なしで結べるというのも高校生にはきつく、せめて大学生や就職をしてからにするのがよいと思う。つまり、私は現行の法律で良いと思う。」

次に、田中先生。「人間は大人だと自覚する環境があれば、しっかりと責任を果たせるだろうと思う。自立心を高め、権利と責任を理解するきっかけづくりにもなるし、18歳成人でいいのではないか。」

自立意識を高めよう

「考えても見なかったことだなあ」と悩みつつアンケートに答えてくれた3年生もいるが、みなさんはどう考えるだろうか。現実の問題として、いつ「18歳成人」になってもおかしくない状況にある。

18歳を実質的な大人にしていくために、親や社会、学校がどのような手を打っていくべきなのかも今後の課題だ。

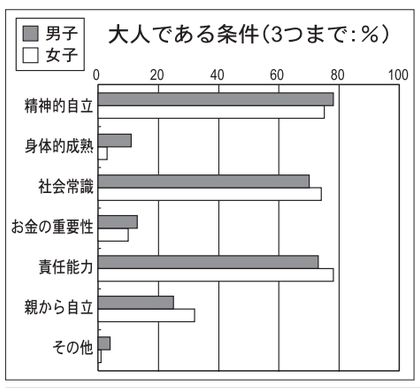
しかし、一番のポイントは私たち若者が「いつまでも子どもでいたい」などと甘ったれずに、自立への意識を高めていくことだろう。

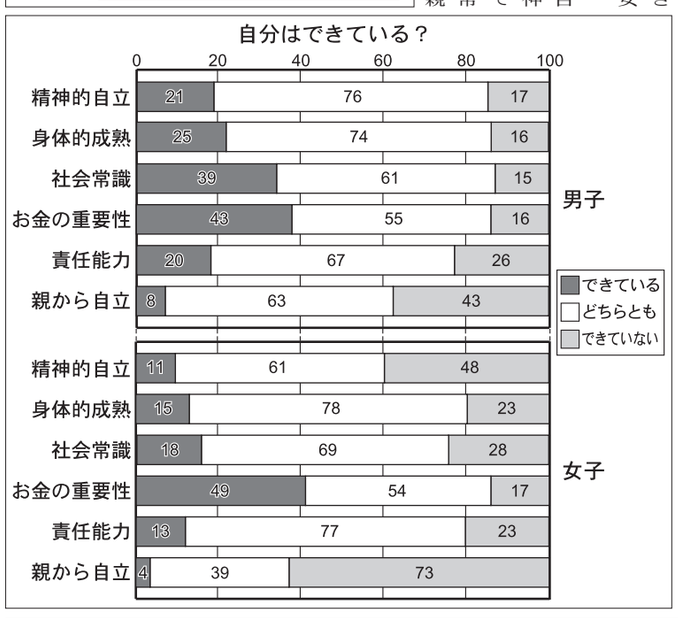
成人年齢関連の動き

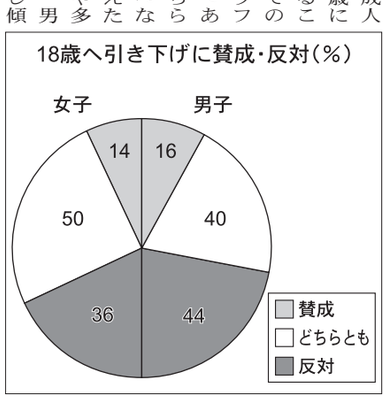
～江戸時代	男女共数え年で15歳で成人（それぞれ元服、髪上げ）
1889	大日本帝国憲法施行
1898	当時の民法で成人年齢は20歳に
1945	日本国憲法施行 民法で成人年齢は20歳に
2007	国民投票法成立で国民投票年齢が18歳以上に これをきっかけに18歳成人が世論にのぼり、動き始める
2008. 2	鳩山法務大臣（当時）が法制審議会に成人年齢の検討を諮問
2009. 10. 28	法制審議会が千葉景子法務大臣に「成人年齢を18歳に引き下げるのが適当」とする答申を提出

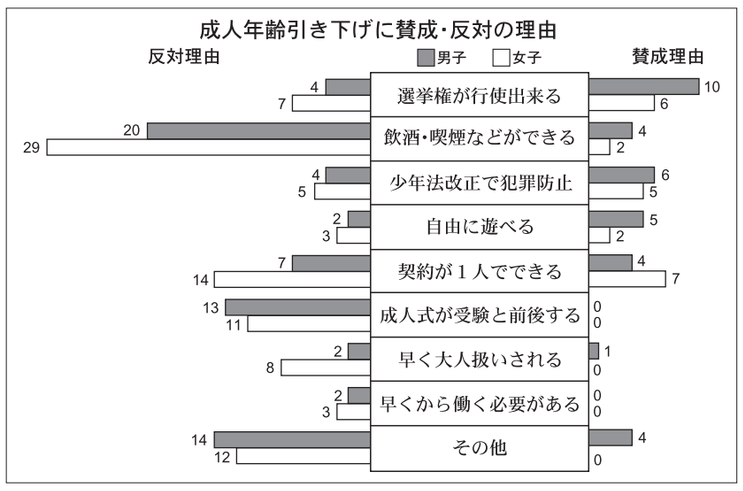
世界の成人年齢

21歳	アルゼンチン エジプト シンガポール
18歳	イギリス イタリア オーストラリア スイス 中国 ドイツ トルコ ブラジル フランス ベルギー メキシコ ロシア
16歳	キルギスタン ネパール
14歳	プエルトリコ









■ 参考資料 ■
朝日新聞
2009年８月29日朝刊
(be between
読者とつくる)
「18歳は『大人』だと
思いますか？」

論説

防災意識を高めよう

伊勢湾台風50年に考える

今年はこの地方に大被害をもたらした伊勢湾台風から50年目にあたる。様々なメディアがこれを取り上げ、防災意識の重要性を呼びかけていた。

災害には、天災と人災がある。天災には大地震や暴風、豪雨、噴火、豪雪などがある。また、人災には交通事故、テロ事件、労働災害がある。いずれも起こってほしくなく、被害を最小限にしたいものばかりである。

＊　＊　＊

今年話題になった伊勢湾台風では、未曾有の暴風と高波により、山間部で土石流や鉄砲水のため住家や耕地の流出、埋没が起き、平野部で堤防の決壊による大洪水が起きた。この台風によってもたらされた被害は、死者4649人、行方不明者401人、負傷者3万8921人にのぼり、日本の災害史上、記録的な規模の被害となった。

11月、本校図書館の企画展でもこの伊勢湾台風が取り上げられていたが、その中に浸水地域が色分けされた地図が貼ってあった。名古屋市の南部を始め、本校生徒が通ってくる弥富町や津島市なども色が塗られて、甚大な被害があったことがわかる。

行政は、この伊勢湾台風を教訓にして災害対策基本法を成立させ、治水対策を強化させた。伊勢湾台風で被害が大きかった海岸地域では、高潮防波堤や防潮堤などが整備された。

しかし、近年は防災工事の予算が削減され、必要な防災工事が行われていない危険な箇所が放置されたままになっている。

他にも、地球温暖化が関連するのかどうかは不明ではあるが、近年多発しているゲリラ豪雨などへの対応を考えると、十分な体制がとられているとは思われない。

また、発生が予想されている東海大地震などへの対応は、それぞれの自治体で計画が立てられているものの、果たしてきちんと対応できるかどうかは不安が一杯だ。

さらに、災害時には自治体と住民との迅速な連絡体制が必要だが、残念ながら十分なシステムができあがっているとは言い難い。

＊　＊　＊

一方、記憶に新しい人災について、JR西日本福知山脱線事故がある。この事故の原因としてはJR西日本の「組織体質」上の問題が指摘されている。

JR西日本が先頃提出した最終報告書では、社長による「独裁的経営」があり、「閉鎖的な組織風土、上に物申さぬ文化、現場を知ろうとしない経営体質」が生まれ、経営幹部を含む社員が自己保身に走ったとした。

安全を最優先すべき公共交通機関が、多くの乗客の命と引き替えに自己保身を図るなどとは、想像を絶する倫理感覚だ。

他にもこの事故の原因として、機械の過信があるのではなかろうか。この事故では時間の遅れを取り戻すことに躍起になっていた運転手が、この速さでもあのカーブで列車が脱線転覆しないと思ったのではなかろうか。

チェルノブイリ原子力発電所事故も同じことがいえる。これは、操業休止中である原子炉で実験をし、その実験中に制御不能に陥り、炉心融解が起こり爆発した事故とされている。

この実験の前に一度でも機械の点検をしていれば、この事故は起こらずに済んでいたかもしれない。

こうした人災をなくすためには、管理体制の徹底や、コンピュータを始めとする機械の過信を戒めることが必要だ。

＊　＊　＊

災害は、人間の知恵ひとつで被害を少なくすることが可能だ。だから、いかに人間が、より適切な行動するかによって、被害の大きさが違ってくる。

そのために、防災についての研究やそれに基づく対策を進めると同時に、どうやったら災害を最小限に食い止められるかを私たちが常に意識して、防災意識を高めていく必要がある。

後記生徒会動き出す

後期の生徒会役員が決まった。会長に立候補した2の2の江頭さん、副会長に立候補した1の8の遠藤君、書記に立候補した2の2の森さんが信任され、残りのポストは議会で、会計に2の5の浅井君が選ばれた。

後期生徒会の仕事には、最大の行事である予餞会と、それに引き続いて球技大会とがある。さっそく活動を始めている執行部全員にアンケート形式で質問をした。

アンケートは次の通り。

① 自己紹介　② 部活　③ 趣味・特技　④ 好きな有名人　⑤ 好きな歌　⑥ 抱負

◆会長　江頭祐里さん

① 丹陽中学出身の、3月19日生まれです。「19」っていう数字が大好きです。② ソフトボール部　③ エレクトーンを10年間習ってたけどそんなに上手く弾けません。④ 柴咲コウの歌が上手くて、美人で演技も上手なとこが好きです。⑤ ドレミの歌　⑥ 半年間西高生の役に立てるよう頑張っていきたいです。予餞会は、必ず成功させていきたいです。

◆副会長　遠藤優輝君

① 大和中学校出身で9月20日生まれです。100という数字を愛しています。② 卓球部です。中学のときから続けています。③ カラオケによく行きます。でも音痴なので高得点がとれないです。④ 松岡修造さんのポジティブで、熱くて、人生を楽しんでいるような所が好きです☆ ⑤ ジングルベルが毎日聴きたいほど好きです。⑥ ヨハネス・デ・レーケは木曽三川を3つの流れに分流しましたが、僕は1年生、2年生、3年生という3つの流れを1つにまとめ、デ・レーケも真っ青なすばらしい学校になるよう努力していきます。そして川の流れのように、西高の伝統がどこまでも続いていくことを望んでいます。

◆書記　森彩那さん

① 稲沢西中出身の6月22日生まれです。好きな数字はもちろん1です。② 新聞部　③ 楽器を吹くこと！特にトロンボーン。④ 嵐　やばいです！特に相葉ちゃん…「マイガール」見ましたか？笑 ⑤ かえるのうた ⑥ みんなと仲良くやっていきたいです。楽しむことを一番に考えて頑張っていきたいと思います。よろしくお願いします。

◆会計　浅井貴大君

① 前期で副会長をしていました。② 弓道部 ③ ゲーム ④ タモリ ⑤ 特になし ⑥ 前期の経験を生かして頑張ります。

浅井君、遠藤君、江頭さん、森さん

作一

『子供の性格は、親の育て方と食べ物に関係がある』。知り合いは、こんなことを言っていた。始まりは、「子供の性格は、親の育て方だけによるものなのか」という私のちょっとした疑問。そのとき私は、子供の性格は、親の育て方とその子の周囲の人の影響によって決まるのだろうと思っていたため、かなり驚いた。食べ物が性格に与える影響って何だろう？というより、どのように影響するのだろうか。▼その人はこうも言っていた。『インスタントものばかりを食べていると、考えがインスタントになる』。その人曰く、人は何事も過程が必要なのだそうだ。食卓に並ぶ料理は本来、買って、切って、煮て焼いて、調味料をつけて…と、かなりの過程を経ている。ところがインスタントものの場合、お湯を入れてふたをして、次に顔を合わせる時には完成しているのだ。▼子供たちにとって、日ごろの食は、親の愛情を内面から感じる1つの方法だ。それを作る過程から見て食す子供と、買ってきた惣菜やインスタントものをそのまま出されるのを見て食す子供とでは、性格の面で、違いが出るのではないだろうか、ということだ。▼その人は、今まで一度も自分の子供にインスタントものや、ファーストフードを食べさせたことがないと言っていた。でも私は、それは現代人では無理だろうと反論した。どんなに食に気をつけている人だって時間がない時があるだろうし、それに、ある程度はそのようなものを家で食べさせておかないと、子供たちは、友達と遊びに行った時に食べ方を知らないせいで馬鹿にされるのではと思ったからだ。▼すると「何も、私はすべての食事を家庭で作れと言っているのではないですよ。時間がない時なんて、私にもあるのですから。私が言いたいのは、食卓に並ぶ料理の全てを、親が作った過程のないものにしないこと、つまり、一品でいいから家庭で過程を経て作ったものを出しなさいということなんですね。」と。▼「確かに私の息子は、高校生の時に友達とマクドナルドに行ったとき、あの子にとっては人生初な訳ですから、興味津々であれこれ聞いていると、友達にひかれたそうですよ。私の息子はおっとりと育ってくれたため、友達のひきもからかいで終わったそうですが。」と。

今年度から購買で
飲み物を販売しています
自販機の利用もよろしく
笑顔のそばに
MEGMILK
メグミルク君島
46－3362

計量器・ＯＡ機器
事務・学用品・書籍
紙徳商店
一宮市萩原町萩原
TEL 68－0034
69－4121
FAX 69－2466

体育服装
クラブユニフォーム の御注文は
製造直納の
(株)水野繊維へ
名古屋市中川区西日置町二丁目15－17
TEL（052）331－3077
TEL（052）331－3127

すくーるフォト♪
スクールあるばむ
稲沢市祖父江町
石田写真館
0587-97-0059

第44回　西高祭

West Dream Fighters
～この夏走り出す、僕らの西高魂～

アイディアきらり

途中中断、延期という昨年の体育祭から一転、今年の西高祭は体育祭・文化祭ともに晴天に恵まれた。暑さで汗ばんでしまうほどの陽気の中、西高祭は予定通り行われた。

文化祭1日目。テーマソング「零ーZEROー」発表後の弁論大会では予選通過の5人の弁士が様々に熱弁をふるった。どれも考えさせられるスピーチだった。特に、優勝した林むつのさんの「しんたいしょう害しゃ」は、自分の今までの認識を改めて考えさせられた。

2日目からはクラス企画も始まり、いよいよ西高祭が活気づいてくる。そんな中、有志コンサート、部発表、クラス企画の劇が体育館を盛り上げた。ブラスバンドと演劇は体育館で部発表を行い、箏曲部、茶華道部、美術部はそれぞれ部室や教室を使って、練習の成果を発表したり作品の展示をしたりしていた。新聞部も『西高新聞に見る西高祭の歴史』展示した。

劇は4クラスが取り組んだ。それぞれにアイディアが凝らしてあるとはいうものの、やはり3年生と1年生では差ができてしまっていた。2年生もおもしろかったが3年生にはかなわず、3年6組が優勝した。また、劇以外のクラス企画もそれぞれの工夫が光っていた。バラエティー部門で優勝した1年8組では、武道場の入り口で脱いだスリッパを出口へ運んでおいてくれる、という新しいアイディアが見られた。

食品バザーは教室棟の1階で行われた。優勝の3年2組「冒足屋」を始め、ユニークな店名が並んでおいしそうな香りが漂う中、元気なかけ声が飛び交って活気に溢れていて大繁盛だった。ただ、思うように調理ができずに、待ち時間が長くなってしまうというアクシデントがあったのが、残念だった。来年はそのような点を改善ができると良いと思う。だが、接客時の挨拶など、どの店もとても満足できるものだった。

物品もまた、食品に負けず劣らず大きな声と丁寧な接客態度が見られた。商品には、ミサンガなど手作りのものからマグカップや茶碗といったものまであった。各軍団ごとのうちわは人気があったようで、買おうとしたが売り切れてしまっていた。また、商品だけにとどまらず、店内の飾り付けにも力が入っていた。全てがお値打ち価格だったのだが、終了時間が迫るとさらに『セール』として、いくつでも10円、はたまたゼロ円というところまであったのには驚いた。優勝は3年2組だった。

ゼミ部門は最も多くのクラスが取り組んだにもかかわらず、テーマが重なっているものもなく、いろいろなジャンルがあっておもしろかった。優勝した3年4組のテーマである『マナー』や、他『睡眠』など少し堅めのテーマを楽しく分かりやすく、というものや皆が知っている『ジブリシリーズ』や『ディズニー』などを詳しくつきつめて調べていたところもあった。また、1年4組ではダイラタンシーが手で簡単にでき、実際に足で水上を走る感覚も体験することができた。そして、1年7組では視覚トリックを目で見て確かめるということもできた。B紙の掲示などだけではなく、自分の体で体験できたので分かりやすかった。他の多くのクラスも参加様式を取り入れていて、自分たちの発表をよりたくさんの人に理解してもらおうという姿勢が見られた。

絆しっかり動作ぴったり

さて、週が明けて、予行練習の次の日。運動場に各軍団のマスコットが並び、体育祭が始まった。午前・午後とも、どの競技でも、応援の様子が学年・男女関係なく、本当に団結していると思った。リレー種目では全員総立ちで名前を呼んで応援していた。綱引きの、特に決勝では、綱のすぐ横まで行って一緒に綱を引くまねをするなど、競技している人はもちろん、していない人までが力を合わせているようだった。

その絆の強さは、リーダーによる応援合戦でも感じられた。動きが多いのに全員がぴったりと合っていて、さらに笑顔で楽しそうだから、見ている方まで楽しくなった。力強い太鼓やドラムのリズムとも一致していて、無意識のうちに拍を数えてしまった。

全体的には雰囲気も良かったと思うが、生徒が自分たちの動きをあまり分かっていない部分が多かった事が体育祭の反省点だろう。私自身、先生が生徒に向かって大声で説明したり、何度も注意したりされているところを見かけた。

また、ある先生が心配されていたことがある。初めての体育祭を晴天で迎えた1年生は、もしも来年、雨が降ったり台風が来たりしたとき、ちゃんとそれに対応して動けるだろうか、というのだ。

この2つをふまえ、来年は一人一人が自分のすべき行動を考えて、もしもアクシデントが起きたとしても、素早く対処していけるようにすべきだと思う。そのためには普段の生活から自分なりの意識を高めていくことが大切だ。次の西高祭の本番は来年だけれども、その成功のための準備は今から始められるのではないだろうか。

MY SCHOOL DAYS

夏休み、暑い日差しに照らされながらリーダーの練習に明け暮れる人たちを見て、感心するとともにそのパワーに少し呆れた。学校祭ってこんなに真剣に取り組むものだったかなと、自分の高校時代を振り返った一瞬だった。

今でもよく覚えているが、高校1年生の文化祭開会式で校長先生は次のようなあいさつをした。「文化祭なんてくだらないものはやらなくていい。ばからしい。」壇上の後ろに控えていた司会の先生は苦い顔をした。次にあいさつをした生徒会長は、その持ち前の明るさで必死に場を盛り上げていた。私は学校行事にはそれほど興味が向かない生徒だったが、迷惑な発言だなと思ったものだ。しかし同時に、周りのことを何も考えないで発言する校長先生をおもしろいとも感じた。自分の意見をはっきり言ってしまう好意が珍しいものに見えたからだ。周囲の同級生にしても、それが稚拙にせよ高度にせよ、はっきりと自分の意見を言う人が中学校と比べて増えたとよく感じることがあった。私にとって高校という場は、人がそれぞれ違うということを以前より認識し、相手の意見を自分の中で反芻する所だった。

MY SCHOOL DAYS
桟敷悠子 先生

淡々とゆったりした日々が流れていった高校生活

さて、文化祭のエピソードからも分かるように、現在私の目の前にある高校生活と自分の高校生活との間にはかなり大きなギャップがあり、4月以降カルチャーショックを受ける毎日である。

私の高校生活はゆっくりしたものだった。朝に補習はないし、授業も6限までで終わる。午後の補習も文字通り参加が選択制だし、休みの日の学校は、野球部が活動している以外とても静かだった。部活に時間を割いたわけでもなかった。入りたかった水泳部が学校になく、他に興味のある運動部もなかったので、友達の頼みを飲んで頭数合わせで英語部に登録をしたのだった。そのころの英語部は、登録はあるけれども先輩はひとりも活動をしていないという状態で、1年生の新入部員8名と去年脱サラして教員になったばかりという新米顧問で構成されていた。やりようによってはどれだけでも楽しくなる可能性があったのだが、適当な理由で登録した部活には何の思い入れもなく、ときどき集まっては軽く英語で話すという状態が続いた。そんな状況の中、かなりの自由時間が浮いた。1年生の頃はその時間のほとんどを読書にあてた。偏りが激しかったが、学校の図書館から年間150冊ほど借りていたらしい。よく図書館にいたので受験勉強をしている先輩と仲良くなり、同じ作品を読んで感想を言い合ったり、小論文のテーマについて先輩の意見を聞いたりして過ごした。漠然と感想を言い合うことと、ある問題に対して自分の意見をはっきりさせることはまったく別の作業だった。

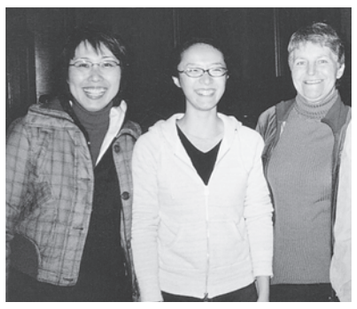
つまるところ、高校時代自分はとくに明確な目標を持って何かをしたことは無かったし、何かに死ぬほど真剣に取り組んだことも無かった。

高校1年生のときから決めていたように、私は大学の人文学部へ進んだ。大学生にはたくさんの時間があり、美術サークルに入って1回生の頃は部長を務めた。作業スペースとして広く確保された部室で、でかいベニヤにペンキで絵を描いたり、いつの間にか住み着いた猫にえさをやったり、お酒を飲んで、鍋をして、よく遊んだ。2回生に上がる際、専門を社会学、国文学、英米文学のどれにするか迷ったが、結局英米文学を選び今に至る。アメリカの、特にごく最近のショートストーリーがすごく好きで、3回生を終えてから、アメリカの大学に留学してその勉強をした。

日本に戻ってくると大学は4回生からの再スタートで、進路については、自分の勉強してきたことを活かす方向へ進むのか、それとも一般企業に進むのかで迷った。そのときはまだ教員になることは全く考えていなかった。

しかし、就職もすでに決まっていた頃、ある夏の日の夜、私は自分の友人の自殺という事件に遭遇してしまった。そのとき私は助けを求められたものの、物理的に助けられない距離におり、結局彼女を失うことになった。その際、自分の進路を考え直し、誰か人の近くにいてあげられる職業に就きたいと考えるようになった。それから試験を受け、4月に西高に赴任することになる。

漫然と好きなことをしていた頃と違い、明確に人生の進路を選択する意志が芽生えたのはそんな最近のことだった。目標は人生を支える。自分の理想に近づけるように仕事を続けていきたいと考えている。



東海地区中学・高校ディベート大会
自動車全部が電気自動車？

7月に、金城学院大学を会場にして第17回東海地区中学・高校ディベート大会が行われた。本校から、1年生の毛利真季さん、木村栞菜さん、橋本紗矢香さんが出場した。この大会では、A論題「日本は国会を一院制にすべきである。是か非か。」、B論題「日本はすべての乗用自動車を電気自動車に切り換えるべきである。是か非か。」の2つの論題があり、3人はB論題に出場した。

内容は、論題について肯定の側と否定の側、それぞれの立場で2試合ずつ行って点数を競うというものだ。1試合は、肯定側立論、否定側質疑、否定側第1反駁、肯定側第1反駁、否定側第2反駁、肯定側第2反駁の8つで構成される。

3人はディベート部があるような強豪校との試合の連続に苦戦しながら、決勝と全国大会の出場は逃したが、6位の成績を収めた。

熱心に相手の立論を聞く本校の3人

滝高や千種高は怖いくらいの迫力
1の5　橋本紗矢香

ディベートは中学校の国語の授業でほんの少し触ったくらいだったので、今回はほとんど初めてでした。なので、毛利さんと木村さんはちゃんとやったことがあるのに、私が足を引っ張らないか不安でした。私は立論を担当したのですが、1試合目は案の定緊張して、下を向いて早口になってしまいました。それを注意されてからはできるだけ前を見て、はっきり話そうと努力しました。でも、毛利さん、木村さんや、他の高校を見ていると、やっぱり自分とは違うと思いました。声が力強いし、言い方にとても説得力があって気圧される感じでした。

特に、滝高校や千種高校との試合は本当にハラハラしました。気圧されるどころか、むしろ怖いと思いました。滝高校は、立論を早口で言わないと制限時間に間に合わないほどの情報量があって、反論できることがほとんどなくて辛かったです。それだけ早口なのにも関わらず、強調するところはちゃんとしていたのがすごいと思いました。千種高校には「ディベート部」があるそうで、全員が赤のTシャツを着ていました（弁が立つ上に赤なんて、すごい存在感です…）。

でも、相手の質問に自分なりに考えて言葉を返すのは楽しかったし、いい経験ができました。誘ってくれた毛利さんと木村さんには、感謝しています。

興味がある人は、「全国教室ディベート連盟」のHPを一度ご覧下さい。

西高の木⑭
マテバシイ

秋になると、中庭にドングリが転がり出す。そのドングリは中庭の南西の角に植わっている、マテバシイのものである。

ブナ科の常緑高木。初夏、新芽が出る頃に花を咲かせてドングリがなるが、熟すのは1年以上経った翌年の秋である。

一般にドングリは渋みがあってそのままでは食べられないが、これは渋味がなく、炒ったりして食べるとおいしい。

マテバシイの語源に、「待てばシイの実のようにうまい実がなる」という説がある。まるで、「明日は檜になろう、檜になろう」と念じていたアスナロ（翌檜）の話に似ている。しかし、葉がマテ貝に似ているからというのが真相らしい。

スピーチ
3年2組　河邉佐奈恵 さん

ニンゲンに注意

みなさんは「猿の惑星」という映画をご存知でしょうか。話の内容は、簡単に言ってみれば、服を着た猿たちが人間を支配してウホウホ威張っているというものです。初めてこの映画を見たとき、猿が銃を持って馬に乗り、人間狩りをするというシーンにかなり衝撃を受けたのを覚えています。

そして、つい先日、私は生物室であるものを見てしまいました。ネズミや魚や生まれたての鳥の雛などが無惨な姿でビンの中に浮かんでいる、それはいわゆる、ホルマリン漬けでした。実物を見るのは初めてのことだったのですが、身の毛もよだつ、とにかくグロテスクなものでした。私は人間の恐ろしさをふつふつと感じ、そこでふと思い出したのが「猿の惑星」でした。

猿の惑星では、猿は高度な文明を持つ知能の高い生物で、人間は口もきけない知能の低い生物です。人間と猿の力関係が逆転しているような世界では、もしかすると、猿によって人間がホルマリン漬けにされてしまうのかもしれません。想像してみてください。ビンの中に浮かぶ自分を。気味の悪いことですが、それが私たち人間が動物にしていることなのです。人間が支配している今の世界で、人間が、口をきけない下等動物たちにしているように、猿が支配する世界では、猿が、下等生物である人間に何をしようと、人間は文句を言うこともできないのです。

幸い、私たち人間は、何千年も前から高度な文明を持ち、知能も発達しています。だからといって、人間以外の生物に何をしてもよいのでしょうか。

医学の分野では、新しい治療法や薬を開発する際に、マウスを使って様々な実験をし、どういう場合に効果や副作用が現れるか、どうしたら死んでしまうかなどを、人間の代わりに試しています。それは、人間で実験して何があったら困るからだと思います。マウスは何があっても文句を言いませんから。これは最近知ったことですが、化粧品の開発の際に、人間に使っても害がないかをウサギの目に入れて実験するそうです。みなさんは知っていましたか？　このように、あまり知られていないことでも、私たちの身の回りのものは動物実験によってできたものがたくさんあるのです。また、生物界の様々な発見は、人間以外の生物を使った実験によって実証されてきました。生物の資料集を見てみれば、体の一部をちょん切ったり、くっつけたり、切り開いたりなど、むちゃくちゃなことをしてきたことが分かるでしょう。実験に使われる生物にしてみたら、知りたがりやの人間ほど恐ろしいものはないと思います。

ところで、この世には弱肉強食という、弱いものが強いものの餌食となり、弱い者の犠牲の上に強い者が栄えるという掟があります。この掟に従えば、人間以外の生物の犠牲の上に人間が栄えているのは当然のように思われますが、はたして本当に人間は強者なのでしょうか。もし丸裸の人間をジャングルやサバンナに放って置いたら、猛獣の餌となり残るのは骨だけでしょう。人間が強いのは、武器を作ったりできる知能の高さのためです。高い知能によって地球ナンバーワンになった人間ですが、人間中心に物事を考え、人間以外の生物を犠牲にしてもいいという考えは少し傲慢な気がします。すべての動物実験禁止！というのが私の本望ですが、もしすべての動物実験をやめてしまったら、今後、医療などの進歩が望めなくなってしまうじゃないか。医療の進歩のためにはマウスを使った実験は仕方のないことだ。しかしそれは人間のエゴです。私の勝手な意見を言わせてもらいますと、医療も科学ももう十分に進歩しているのだから、これ以上進歩しなくてもいいと思います。一歩ゆずって、私は、それがマウスだからいいという考えは良くないと思います。せめて、人間のために犠牲になっている動物がいることを頭の隅に置いておくことです。

「猿の惑星」の話に戻りますが、話の中で、人間を支配していた猿たちは、大昔に人間が猿をはるかに超えた文明を持っていたことを信じようとしませんでした。また、人間が高度な知能を持つことを恐れました。猿が世界の強者であるという現実が脅かされることを恐れたのです。

今、私たちは、人間が強者である世界に何の疑問も持たず、強者であることに甘えて好き勝手なことをしています。しかし、数千年後、今までどおりに人間がこの世を支配し続けているとは100パーセント言い切れません。今からでは遅いかもしれませんが、人間以外の生物に対する高慢な態度を改めてみる必要があると思います。いつかの未来、人間を越える高度な知能を持った生物によって、彼らの代わりに動物実験ならぬ人間実験が行われてしまわないように。

編集後記

▼今回は特集を担当しましたが、思いの外難しく、時間が足りなかったこともあり、色々と添削させられてしまいました。そのことが少し心残りなのですが、それはそれ、結果としては良くなったと思うので、ぜひご一読を。（わ）

▼「災害」をテーマに論説を書きましたが、想像以上に難しく、うまく自分の言葉で表現できませんでした。少し不安要素があって心配です。次はもっと上手に書きます。（し）

▼今回は前よりやる事が多かった気がしました。大変だったけど、その分充実していて良かったです。最後、見出しを考えるのが遅くて先生に頼ってしまったので、今度は時間配分をきちんとして、見出しもじっくり考えます。（さ）

▼今回担当させてもらった「串作」では、初の「漢文風」？に挑戦しました。私の習字の先生の、独特な考えや私の中での存在感の大きさを、みなさんにも理解してもらえたら嬉しく思います。（あ）

あなたも新聞作成に参加しませんか
部員募集中です！